快感総集編

クリムゾンコミックス

エアリスと出会って一週間

ホテルのチェックイン済ませてきたよ～

クラウドは204号室ね

私とティファは205号室に泊まるから

じゃ行きましょティファ

正直何を考えているか分からないし苦手だった

快感のマテリア

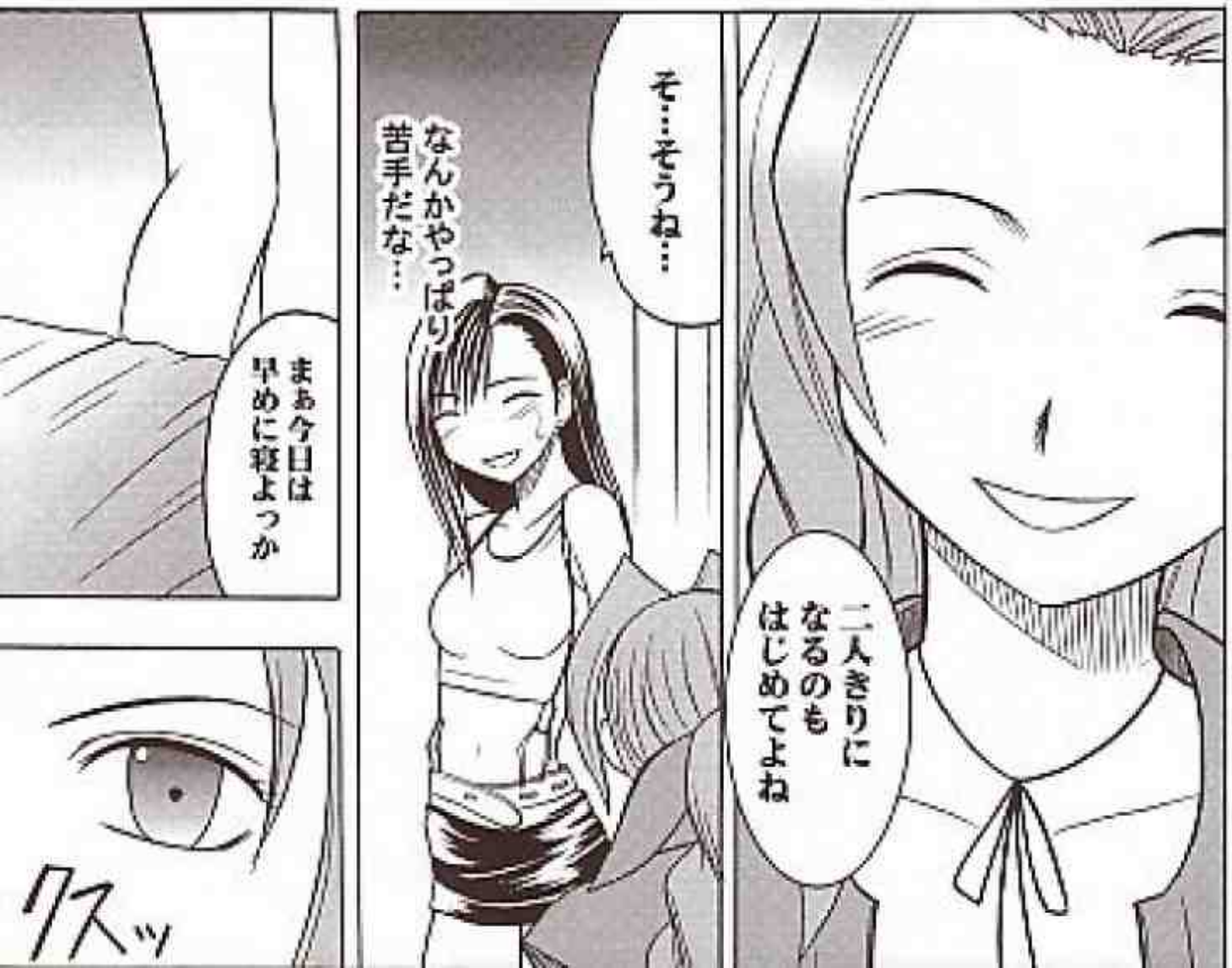
第１話
「理解不能」

作／カーマイン

なんか
まともなホテルに
泊まるのって
初めてだよね

バタン

……



ティファって
胸が大きいよね～

……！

ギュッ

わ～
すご～い♥

もみ

ちょっ……！

もみ

ほら
い～じゃない

ちょっと
エアリス！

もみ

もみ

もみ

ぐぐっ

90センチくらいあるんじゃない？
もみ
もみ
もみ
ダメ！
ダメだって！
ホントいい胸ね
ドカッ
も…もう！
いい加減にしないと怒るわよ！

はぁいぃ♪
くふぅ！
あぁ
なんか今かわいい♪でたよぅ
……！
もぅ…
何なのよ一体…

ねぇティファ

これ何か分かる？

……何？

ドキ

ドキ

フフフ…

これはね…

…！

バッ

あっ！

ダダッ
ドン
あぁぁ!!
グチュ

えっ…？
…！
あれ？
何これ…？
ぶるぶる
な…何を入れたの！
エアリス…ッ！
ぶるぶる
それはね快感のマテリアっていうの
穴に入れるとすごいことになるのよ

ゲ
ゲ
ゲ

ダメッ…！奥に入りすぎて届かない！

これ以上指を入れすぎると感じすぎて…！

……！

ぶるぶる

わ～

なんかオナニーしてるみたいよティファ～

ダメ…自分じゃとれない

ぶるぶる

早く取ってよエアリス

え～？

もう取っちゃうの？

じゃあ…

えっ！

取って
あげるから
おとなしく
しててね

え？
なんで？

なんで
手錠するの？

ほら
足を開いて

グイ

あっ…！

ギシッ

なっ
……

何するの
エアリス！

ぶるぶる
あんっ！
あっ！
くっ！
んっ！

ビクッ
つつ…
こ…これが…
快感の
マテリアの力…!!
んっ!
ダメッ…もっと
抵抗しないと
この人の
ペースに…!
ギシ
ギシ
あ〜

な～んだ こんなところに あるじゃない マテリア
クリクリ
やっ…！
それは ちがっ…
えいっ♥
ひいっ!!
ドピュッ

も…もう
エアリス…！

まじめに…
やってよ…！

こういうこと
されるのって

ギシ

ギシ

イヤ？

はじめて
なんでしょ

すう…

やっぱり
恥ずかしい？

羞恥心さえ
捨てれば二人で
楽しめるのに

仕方ない
な〜

つつ〜

私一人で楽しませてもらうから
存分にイジメてあげる
フフフ
ビクッ
やっ…!
やめて!
!!

ホント敏感ね～

あっ…イヤッ！

こちょ

こちょ

ああっ！

ギシ

ギシ

クチュ

あっ…！

もう…許して…！

ぶるぶる

ん～？なんで～？

取って欲しいんでしょ？

グチュ

だったらもっと奥まで指を入れないとね

グチュ

あっ！

くっ！

あっ…！

クチュ

クチュ

か…かき回さないで！

びくっ

びくっ
グチュ
グチュ
グリ
なんで…！
ぶるぶる
あっ…！
ギシ
ギシ
はっ…!!
なんで私がこんな…！

やっ！
胸は関係ない……
こんなに胸を揺らされたら触りたくなるじゃない
んっ！
ギシギシ
チュ
チュ

あっ!!
ピチャ
ぶるん
グチュ
グチュ
グチュ

えへへ～
さっきから
何回もイッてる
でしょ～

ぶるぶる

まだ会って
一週間もたって
ないような人に
こんな姿を
見られるなんて…

ギュッ

おねがい…

ぽの
ぽの

おねがいだから
早く取ってよ

それがね～
すごく奥に
入っちゃってて
取れないのよ～

ガバッ

あっ！

あ
あ
ドクドク
ドクドク
ペロ
ペロ
ぶるぶる
どう？
恥ずかしくて
たまらないでしょ

ペロ
ペロ
あんまり大声だしちゃうと隣の部屋に聞こえちゃうよ
でも声ガマンできないくらい責めちゃうけどね
んっ!
ギシ
ぼあ
どうしてこんな恥ずかしい目に……!
ぼあ
どうして…
ギシ
ピチャ
ピチャ

はっ！
ペロ
ペロ
ぶる
ぶる
はぁっ！
グチュ
グチュ
んくっ！
ぶるぶる
ちゅうう

ダメ……！
もっと
抵抗しなくちゃ……！
んんッ！
んっ！
ピチャ
ピチャ

んっ！
ギュッ
くっ！
ふうっ！
あっ！
ピチャ
ピチャ
ギシ
ギシ
はあぁっ！
クチュ
クチュ
快感のマテリア
入れられてるのに
よく耐えれるわね
すごいすごい
あと何秒
もつかしら？

ちゅうう
ビクッ
ひうっ！
ギシ
ギシ
ビクッ
ビクッ
ギシ
ギシ
あぁっ！
そこはっ……！

イき
なさい
ニチャ
!!

はあっ！

あッ！

イカない……！
絶対イカない……！

ペロペロ

ジュルッ
レロ
ああああっ！
ぶるぶる

ドドド

ホテルの一室で
二人きりになったティファは
ギシ
ギシ
ペロ
ペロ
ギシ
体中の性感が
上昇する
快感のマテリアを
膣に埋め込まれ
責められつづけていた
ペロ
ペロ

快感のマテリア
第３話
「ギリギリ」

作　カーマイン

んっ！
クチュ
クチュ
あっ！
クチュ
クチュ
うわ～ティファ
Gスポットが
膨らんできた～
グリ
ほ～ら
ぶる
ぶる
イクぞ～
イクぞ～

触られるほどに
アソコが敏感になっていく……！
ビクッ
ぶるぶる
ビクッ
グチュ
グチュ

こう何度も
連続でイカされてると
もう頭の中が真っ白で
何も考えられない
かな～？

だんだん
抵抗がよわく
なってきたよね

そうだ…

抵抗…
もっと
抵抗しなきゃ…

そんなティファに
朗報で～す

この快感のマテリアも
他のマテリアと同様に
成長してね

穴の中に入れて
イカせるたびに
どんどん成長して

ますます性感を
高める効果が
上昇するの

イカされれば
イカされるほど
ますます
イキやすい身体に
なっちゃうわけ

…っ！
超敏感になっちゃって
好きなときに好きなだけイカされるような
ギシ
ギシ
ひっ！
Hなおもちゃにされちゃうよ～
ピチャ
ピチャ
グチュ
グチュ

んっ……！
んんっ！
あっ！
やだ…そんなの……！
ぶるぶる
絶対イヤ……！
ほら～そんな抵抗じゃまたイカされちゃうよ～
ここでイクとまたイキやすくなっちゃうよ～
クリ
クリ

や…やめて…！
ニチャ
もう…！
ニチャ
んっ！
ギュッ
ペロ
ギシ
ああああああっ！
ギシ

イッたらまたイキやすくなっちゃう…
もうこれ以上イクわけには…
なんとかこの循環を断たないと…
はあ
はあ
…！
ビクッ
えっ？
ドキッ
やっ…やだ！
ズッ
ニヤ

ちょっと
疲れちゃったから
あとはこれで
イカせてあげる
ガチャ!!
ウィ
ウィ
ウィ
ウィ
機械って言っても
あまく見ちゃ
ダメよ〜
これをクリにあてると
すっごい刺激が
強いんだから
……!

ああああああッ！

んっ！
あっ！
さ～て
指も入れよっか
グチュ
グチュ
あ、あ、あっ…!!
こうやって
包皮をめくって
ローターを
あてつづけながら
あっ！
ぴくっ
ぴくっ
あ、あ、あ!!
Gスポットを
こすり続ければ
……

そんなにイキたくないのかしら？
ん゛ッ！
おやおや抵抗するのティファ
ぶるぶる
グチュ
グチュ
…っ!!
ん゛ッ！
ぶるぶる
そんなに抵抗してもムダムダ
んッ!!

ほら
ムリヤリ♥
ぼあ
ぼあ
いやっ…！
ぶる
ぶる
ゲゲゲゲゲ
ゲゲゲゲゲ
ゲゲゲゲゲ

ドクン
ドクン
ドクン
ドクン
ドクン
ドクン

ギミ
ギミ
ガリ
ガリ
ガリ
ガリ
グチュ
グチュ
巨砲
砲
砲

いいのかな～
そんなに大声
だしちゃって…

言ったでしょ

隣の部屋の
クラウドに
聞こえちゃうって

ドキッ

……

あ…
しまった……！

忘れてた……！

……！

ドン

ドン

あら？
クラウドかしら？
……！
うそっ……
扉の向こうに
クラウドが……！
クラウドに
こんなところ
見せられない……！
さあ
いくわよ
やっ！
ガチャ
は～い♥

……
……
あ～クラウド～
こ…こんなの…
絶対気付かれる
わけには…

お前ら うるさいぞ
オレはもう寝るから 静かにして くれないか
は～い
ゲゲッ
ドドドドドド
じゃあ おやすみクラウド～
！
……！

お前らも早く寝ろよ
は～い♥
ぶるぶる
うそっ…！
ビクッ
ビクッ
ズズズズ
クラウドに聞こえちゃう…！
バタン
……
うふふふ…

クラウドに気付かれずによく耐えたわね

カチッ

……！

ほら声だしちゃダメでしょ

むぎゅ！

びくっ

ぐりぐりぐりぐり

ぶるぶる

た…立てない…！

また…ダメだ…！

んんんんッ！
ぶるぶる
ビクッ
ビクッ

おつかれさま
ティファ
すごく
かわいかった
わよ〜
ぽあ
ぽあ
ぽあ
ぽあ
ぽあ
ぽあ
ぽあ
ぽあ
ぶる
ぶる
ぶる
ギシ
クラウドに
怒られるから
私そろそろ寝るね
じゃあ
おやすみ〜
ぽあ
ぽあ
ぽあ
……

快感のマテリア２
第４話

「羞恥風呂」

作　カーマイン

シャアアア…

まさかエアリスが

あんなことをするような人だったなんて……

とにかくエアリスが寝てる間に

ビクッ

この快感のマテリアを取り出さないと…

……

クチュ
んっ！
ぼあ
ぼあ
クチュ
んっ…
クチュ
ぼあ
んっ！
びくっ
だめだ……！
やっぱり
とれない……
ぶる
ぶる
それに…
感じすぎちゃって
これ以上続けると…
ギイイ…

ドキッ

は～い
ティファ～

いっしょに
シャワー浴びよ～

……！

えっ…？
ちょっ…ちょっと…

あらやだ
ぐふふ～

ティファったら
オナニーしてたの？

そんなに
したいんだったら
言ってくれれば
いいのに

バッ

やだっ！
違うっ！

や…やめてっ！

ぶるぶる

ビクッ

一度指を入れられると抵抗できない…！

グチュ

これはお湯じゃないわよね

ヌルヌルしてる

ビクッ

んんっ！

ぶるぶる

こんな簡単に…！

んっ!!
ぶるぶる
ぶるぶる
グチュ
グチュ
ミャアア
風呂で暴れられると危ないから
今のうちに縛っちゃおうか……

はぁ…!!
ぼあ
ぼあ
ぼあ
あっ…!!
ぼあ
ぼあ
ぼあ

フフフ…
ぼあ
ぼあ
ぼあ
ぼあ
ぼあ
ぶるぶる
ぶるぶる
チル
チル
ギシ
ギシ
クチュ
クチュ
クチュ
ぶるぶる

さっきから
イキっぱなしね
ティファ
ぶる
ぶる
ぶる
ぶる
ほらほら
ビクッ
さっきから全然
快感が収束させてもらえない…
グチュ
グチュ
えへへ～
たっぷり
石鹸をつけて…
チル
チル
フフフ…
ダメ

うそっ！
そこはダメ！
ギシ
ギシ
グチュ
グチュ
い～のい～のお風呂だから気にしない
ぶるぶる
う…あっ！
な…何か入ってくる！

「ぜんたいか」のマテリアよ

これで体中どこもかしこもクリトリスなみに感じるようになったわ

ほら

ピチャ

ピチャ

チル

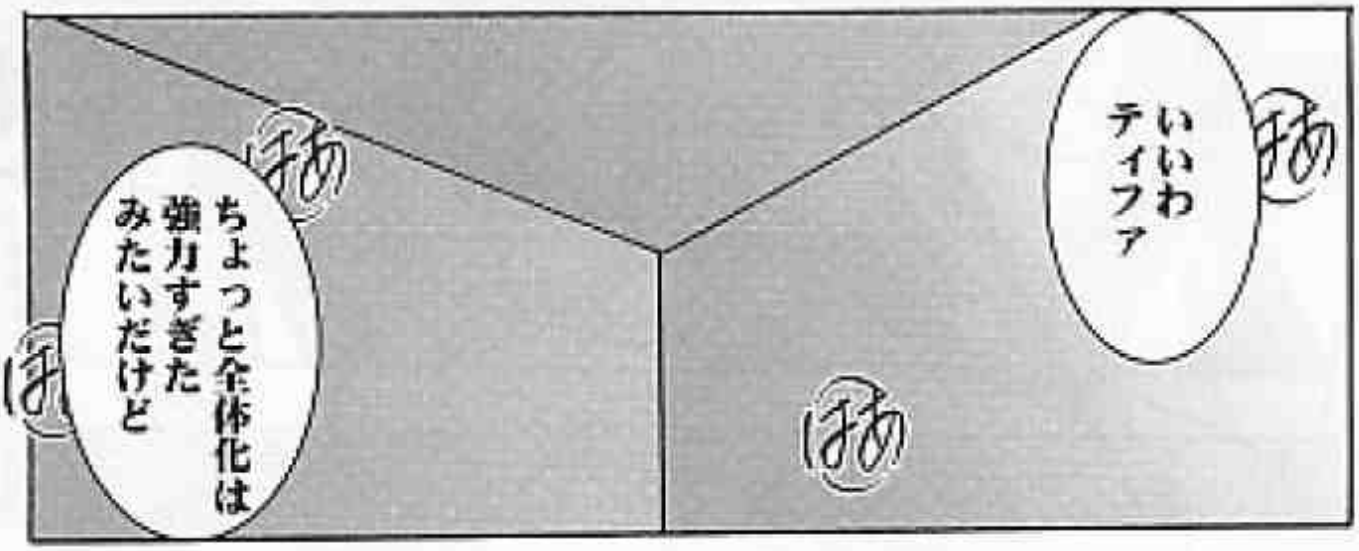
ほらほら

チル

あぁっ!!

ビクッ

あっ…
ああああッ！
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ


いいわ
ティファ
ぼあ
ぼあ
ぼあ
ちょっと全体化は
強力すぎた
みたいだけど
ぼあ
ぼあ

あとは
シャワーで
イカせるね

ぶる
ぶる
ぼあ
ぼあ
ぼあ
ぼあ
ぼあ
あと30回くらい
イッたら
今日は終わりにしようか

……
ぼあ
ぼあ

ミャアアア

ひいいッ！

ぶるぶる

やだ……！
私…このまま
どうなっちゃうの？

ほらどう？
ローターみたいな
感覚でしょ？

どこにあててても
イキそうね

ぼあ

ぼあ

ぼあ

ぶるぶる
もみ
もみ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

今日も十回ノルマね

その後もティファは二人きりになると必ずエアリスのおもちゃにされていた

んっ!!

んっ!

今日こそは
絶対抵抗しない
そう思っても
体に埋め込まれた
快感のマテリアが
ティファの抵抗を
阻止する
結局毎晩
エアリスが飽きるまで
イカされ続けていた
ドン
ドン
ドン
グチュ
ギシ
ギシ

快感のマテリア
第五話

「完全なる快感」

作　カーマイン

じゃあ今日は六番街の方面に行くぞ

いいな？

ビクッ
?
……!
さわ
あっ…
なんでもないのよ クラウド
まさか、三人でいるときまで、するつもりなの?
ドキ
ドキ
エアリス…!

ムニ
やっぱり……！
ちょっ……
やだっ！
ムニ
クラウドが目の前にいるのに……！
ビクッ
もみ
もみ
もで
もで
こんなとこ見られたら……！

大声出すと
クラウドが
振り向いちゃうよ～
……！
どう？
スリルあるでしょ？
……ッ!!
ギュッ
ギュッ
だめっ……！
ンッ！
感じるところを
触られると
ぶるぶる
ンッ……!!
もみ
もみ
もみ
やっぱり抵抗が
出来なくなる……！

でも今はだめ！
スッ
……！
絶対にだめ……！
ドガ
……っ!!
ドガ
ぐっ!!
ぶるぶる
もぐ
もぐ
絶対に……

快感のマテリアが完全に成長したわ…

これでティファはもうどんな状況でもぜったいに快感に逆らえない

ぼあ

今ここで実証してあげる

……

えっ……

ちょうと……!

……!

うそっ……!

ドクン
そんなっ……！

ねぇクラウド～
…！
うそ…！
ブチュ
クラウドが…！

ダメ……！
ビクッ
ん…っ!!
ビクッ
ん…っ!!
ぶるぶる
キュッ
ダメ……！
ダメッ……！
グチュ
グチュ

ああぁっ！
ビクッ
ビクッ
ギュッ

……
……
グチュ
グチュ
見られた……！
今……完全に……
ぶるぶる
ちっ……違うの！クラウド！
どうしよう……！
これはっ……
……！
チル
えっ！またっ！
ダメッ……！

ぶるぶる
ぶるぶる
ぶるぶる

快感のマテリア
第六話

「ティファファイナル」

作　カーマイン

ティファ達の様子に
あきれたクラウドは
一人でどこかへ
行ってしまった

……！

二人きりになった
ティファには当然のごとく
性の地獄が待っていた

ビクッ

クリトリスに紐を
結び付けられ
逃げられない
ティファは

時折イカされて
遊ばれながら

ギュッ

ビクッ

ほあ

ビクッ

ほあ

ほあ

ギュッ

エアリスの思い通りに
見知らぬ場所へ
誘導されていった

きょうこそよ
やっ…やだっ！
なにっ？
きゃっ！
ドキ
何？
ドキ
この部屋…

じゃあここに
てきよせのマテリア
置いとくから

フフフ…

これでみんな
ここに来てくれる
はずよ

ティファの
H な体を見ると
どうなるかな～？

えっ…

ドキッ

ドカッ

そんなっ！
まっ
待って！

じゃ
あたしはクラウドを
探してくるね

えっ…

うそっ？

こんなところで
一人で…？

ドクン
こんないやらしい部屋で…
こんな体の状態で…
こんな状況で誰かに…
ドクン
それに…クラウドも呼んでくるって…？
ガチャ
もし…こんなところで…見られたら…
びくっ
誰…？

ん？なんだ この部屋は
なんだあの女？
……！
神羅兵……！
まずい……！
おい…なんか 縛られてるぞ
へへへ こいつは思わぬ ところで…
まずい…
まずい……！
いやあっ！

やっ！
やめろ！
おい なんかパイプとか いっぱい置いて あるぞ
……！
ドキ
へっへへ
これを使って 犯してくれって いうことか？
ズッ
ちっ 違うっ！

ギシ
このままじゃこんな人たちに犯される…！
オラおとなしくしろよ
もっとちゃんと押さえつけろ
ギシ
ギシ
ああっ！

おや？
なんだ？
ぶるぶる
あっ!!
必死で抵抗してた
クセにここ触られた
途端すげえ反応だな
もぞ
もぞ
あっ…
ぎっ…
あぁっ!!

嫌なんじゃないのか？
何でこんなに感じてるんだ？
やっ……！
駒もスゲェなコイツ
だめ……！
るぶるぶる
やっぱり感じてる！
もみもみ

見ろよ
この反応
クリ
クリ
くうッ…！
ビクッ
ビクッ
ああッ！
あっ！
こんなに
敏感な女
見たことねえぜ

ぶるぶる
ダメッ…！
ギシ
ギシ
あっ！
ああッ！
もみもみ

嫌なのに……！
ビクッ
ビクッ
こ こんなところでイッたりしたら……！
絶対にまずい……！
快感のマテリアのせいで……！
ぶるぶる
イカない！
絶対にイカない！

ぶるぶる
ピロ
ピロ
ピロ
ピロ

ぼあ
ぶるぶる
ぼあ
オイオイ マジかよ イッたぜ
まだ一分も たってないだろ？
まずい……！
また体中がしびれて……！
ぶるぶる
こいつとんでもねぇ インラン女 なんじゃねぇか
このままじゃまた あっという間に……！
ぼあ
ぼあ

せっかくだから
そこらじゅうに
置いてあるエロい
おもちゃ使ってやろうぜ

そうだな～

ああっ！

やっ
やだっ！

だめっ……！

ひっ……！

このままじゃ……！

ぶるぶる
ぎゅっ
ぎゅっ
イッた
またイッた

うおっ！

ぐわっ！

…！

は…
はい…

あ
ありがとう…

もう大丈夫だ
お嬢さん

神羅のやつらに
ひどいこと
されなかったか？

ん？

君は…

確かお前もアバランチの…
セブンスヘヴンにいたティファさんだよね？
どうしてこんなところに…
まぁいいとにかく七番街に帰ろう
……
は…はい……
……
……
ブルッ

えっ？
きゃっ
きゃああ！
やっ…
なっ何…！
何するんですか！
こんないい体見せ付けられて我慢できないよ
へへへごめんねティファちゃん

あいつらにヤラれるよりはマシだろ？

ギシ

ムニ

そっ…そんな！

ギシ

ムニ

なんか周りにいっぱい道具が置いてあるな

使わせてもらおうか

これ敏感になるローションだってよ

チル

チル

いやっ！

これ当てるとどうなるのかな？

ブルブル

ぎゅう
ナっ……!!
チル
チル
ちっ……!!
ぎゅう
快感を与えられると
もう何もさせて
もらえなくなる……!
ぶるぶる

やっぱりこのおっぱいは最高だな
ふっ！
以前見たときからずっと触りたいと思ってたんだぜ
はっ！
くうっ！
すごい…乳首をつまむと痙攣してるよ
あっ！

ぶるぶる
ぼあ
ぼあ
ぼあ
ぼあ
ミシッ
やっ！
あっ！
ピチ
ピチ
ピチ
んっ…！
ぶるぶる
ああっ！

ダメ…！
イッちゃう…！
私の体…
どんな人の愛撫でも…
簡単に…！
ギュルッ
ギュルッ
ギシ
ぶる
ぶる
ギシ

まだまだ終わりじゃないよ～
せっかくいろいろ道具があるんだからな
いやっ！
もう…
やめて…！

やっ！
おっ イッたっ！
やっ！
ああぁっ！
またイッた！ スケェー
んんんっ！

ティファちゃんちょっと
H過ぎるんじゃ
ないの～？
ぶる
ぶる
あっ…！！
もみ
もみ
そんなに
好きなのかい？
こういうこと
あっ…！

もう…
止まらない…
体が勝手に……！
こんな簡単にイク女
初めて見たよ
イヤっって
言ってるくせにな
こんなに簡単に
イクなら逆に
寸止めとかした方が
面白いんじゃないの？
えっ！
おっ
いいね～それ
ひっ！
ぴくっ
もみ
もみ
ぐっ
ぐちゅ

……！
ズッ
ぶるぶる
はあぁ……！
おっ？どうしたの？
なんか残念そうな顔してるよ？
ぶるぶる
やっ…
グッ
グチュ
ひっ！

はああっ！
ぶるぶる
あっ！
もみ
もみ
ぐぐ
ぐぐ
ぐぐ
ぐぐ
んっ……！
……ッ！
くっ……！
ぶるぶる
ぶるぶる

……
ピタ
ギシ
やっ…
ぶるぶる
フフフ…
ギシ
分かりやすい反応するねーティファちゃん
あっ…
ズッ
ああっっ…！
ビクッ

あっ！
私の体なのに……！
あっ！
ゃっ……！
乳首もダメッ……
はあっ！
アソコもダメッ……
グチュ
グチュ
もう全部ダメッ……！
ああっ！

ピタ

……！

いやっ……！

ぶるぶる

だめえっ！

無理やり
イカされるのが
嫌なの？

それとも
イカせて
もらえないのが
いやなの？

ほ～ら
どっちがいや
なのかな？

……！

どっちかはっきり言わないとこのままの状態を続けちゃうよ～

はぁ…

ビクッ

ビクッ

そっそんな…

…っ!!

ビクッ

いいのかな～？

ムニムニ

ふるふる

私…！

ブウウン

ピタッ

んっ…！

ふるふる

…！

無理やりイカされるのは悔しいけど…
ぶるぶる
んっ！
…っ！
もみ
もみ
もみ
イカせてもらえないことのほうがもっとつらい…
こんなの…
…!!
つらすぎる…!!
イク…!
今度こそ…
チュ
もみ
もみ

……！

ズッ

えっ……！

ダメッ……

もうダメ……！
ガマンできない……！！

さっきまであんなに
イカされるのを
いやがってたのに

くやしい…
くやしいけど…

ちょっとじらすだけで
今度はイキたくて
しょうがなく
なるなんてね～

じゃあ今度こそ
イカせてあげよう

私の体…もう完全に
この人たちの思い通りだ…

…ッ！
ぶるぶる
あっ！
ああっ！
ムリヤリ
イカされるのは
悔しいはずなのに…
ほ～ら
イッちゃって
いいよ～
もう…どうしようもない…！
イク…！！

えっ！

フフフ…

ズッ

たのしいな～
寸止めプレイ

……

ぶるぶる

……ッ！

ぶるぶる

やああっ！

やだっ！

おねがい！

おねがいッ！

ギ

ギ

ギ

おねがいだから
イカせてえ！
もっと
イカせてえッ！

……
……
あっ…
ん？
ギシ
誰だ？
ギシ
……
ね？
わかったでしょ
クラウド
あれが
ティファの
真の姿よ

クラウド…
違うの…！

いきましょ
クラウド

まって
クラウド…！

そんな……！

へへ…何かジャマが入ったみたいだけど
ちゃんとイカせてあげるから安心しなよ
ビクッ
あっ…！
ごんな姿見られて…
はやく…はやくクラウドを追わなきゃ…！
ぱあ
ぱあ
追って誤解をとかなきゃ…ならないのに…！
ペロ
ペロ
ヤッ…!!
ダメ…もう体が快感に逆らえない…！
ビクッ
ふっ！
くちゅ
くちゅ
無理矢理イカされるのは悔しいはずなのに…！
…あっ!!
もう…もうどうしようもない…!!

ぶるぶる
ぶるぶる

今度は
オレたちが
気持ちよくなる
番だぜ
い…いやっ！
ほら
足開けよ
いやっ！
いやぁ！

何をいまさら抵抗してるんだ？
ほら
ギシ
ギシ
ズズ
ズズ
ズズ
ズズ
ズズ
ズズ
や…やだっ！それだけは…！
挿入されるのは…！
いいだろ？入れてほしいんだろ？
クラウド…！
いやっ…！
助けて…！

あ…
ぷるぷる
ドドド

おや？入れただけで軽くイッちゃったね

まだ動かしてもいないのに

ビクッ

ビクッ

体が痙攣してるよ

これで激しく突いたりしたらどうなるのかな？

グチュ

ぶるぶる

やっ！

チル

チル

・・・・っ！

ほらほら動かすよ～

ガシッ!!

んっ！
あっ！
…あっ！
ぶるぶる
んっ…!!
も…もう…
ダメ…！
本当に…
ダメ……！
くっ…!!

ん!!
ん!!
ん!!
ん!!
頭が真っ白に…
なって…い…く……

ドンッ
ドンッ

ダメ…
ほあ
ほあ
ダメ…
ほあ
ほあ
オレはこっちな…
ほあ
ほあ
おっアナルいくのか？
おいおい入るのか？
ティファちゃんならいけるだろ
ヤ…!!
ギシ
ギシ

ハッ…!
ぶるぶる
あっ…!!
あっ…!!
あぎっ!!

ぶるぶる

ぐっ…!!
ん…っ…!
はぁ…
チュ

ぶるぶる

――それは三日前のことだった。
クラウドがティファの元を去ってから一週間ほど経っていた。
ティファの心は完全に打ち砕かれ、言いようのない虚脱感が彼女を支配していた。
もう何もしたくない……もうどうでもいい……
それでもティファは、無意識のうちにセブンスヘブンのカウンターに立ち続けていた。
こうしていれば、いつものようにクラウドが帰ってくるんだ――
心のどこかでそんなことを考えていたのかもしれない。
粉々に砕かれた自分の欠片を一つ一つ拾い集めるように、ティファは人形のように働き続けていた。
そんな時、思いがけないところから彼女はクラウドの情報を得ることとなった。
「ああ、こいつなら3番街の廃墟で見たぞ、間違いない」
ハッと、ティファは弾かれたように目を向ける。声の主は、壁に貼られたクラウドの写真を見ていた。
一縷の望みを賭けて、彼女が貼っておいた写真だった。
「……」
ティファはすぐに返事をすることができなかった。
心臓の鼓動が一気に跳ね上がり、全身に血液が回るのを感じていた。
「おい、お嬢ちゃん、この男なんだがな。3番街の奥のほうで見たって言ってるんだよ」
「あ……はい、ほ、本当ですか！」
再度の男の声に、ティファはようやく返事らしき返事を返すことができた。男は呆れたように続ける。
「大丈夫か？　まあいいや。それでだな、この男――クラウドだっけか？
二日前に3番街で女と一緒にいるのを見たんだよ」
間違いない、クラウドとエアリスだ。
ティファの中に、喜びとも怒りともつかないような、奇妙な興奮が生まれた。もう二度と会えないと思っていた。
自分を陥れたエアリス、そして裏解とはいえ彼女を捨てたクラウド。探し出して、きちんと誤解を解かなければ……

「この男、食い逃げでもしたのか？　と、そんなことより……」
男はティファに向かってウィンクをしてみせた。
「えっと……」
戸惑うティファに男は心底呆れたようだった。
「えっと……じゃなくて、ビール。ビールだよ！
確かな情報にはビールを一杯オゴッてくれるんだろ？この写真の下にそう書いてある。
それとも、ガセだと思ったかい？」
「い、いえ、とんでもないです！すぐ用意いたします！」
ティファは慌ててビールをジョッキに注ぎ、カウンターの前に立つ男に振舞った。
男はジョッキを手に取りそれを一気に飲み干すと、かぁーっと気持ちよさそうに息を吐き出した。
「ところでお嬢ちゃん、この男を探しに行くつもりなのかい？
……いや、余計な詮索はするつもりはないよ。ただ、3番街だからさ、魔洸列車に乗らないと
行けない場所だろ？ＩＤは持っているのかな……と思ってな」
その言葉に、興奮気味だったティファの心が、再び絶望感で満たされ始めた。
反神羅組織の一員である自分が、身分を照会するＩＤなどもっているわけがない。
最近は、テロを警戒してか監視も厳しく、以前のように忍び込むこともできない状態だ。
開きかけたクラウドへのドアが、今まさに閉じようとしている。
ティファは答えることができなかった。
「その様子じゃ、ＩＤは持ってないようだな。そこでモノは相談なんだが、
もう一杯ビールをオゴってくれるなら、なんとかしてやらんこともないぞ」
「え……」
「ＩＤだよ。まあ、ＩＤっても、本物は無理だからな。偽造ＩＤなら用意してやることができる」
「ほ……本当ですか！」

「おっと……声がでかい。いくつか条件があるんだがね」
男は声を潜めて、耳元で囁くように話し始めた。
「まず、私の指定した車両に乗ること。そしてもうひとつは、決して騒ぎを起こさないこと。この二つが守れるなら、偽造ＩＤで魔法列車に乗ることは可能だ。
だが、監視がないわけではないからね。見つかったら私にはどうすることもできないよ」
「はい……」
まさに藁にもすがる思いだった。
ティファはその男の言うとおりに、偽造ＩＤで、３番街へ向かうことに決めたのだった。

「ピーー」
背後で鳴り響いた警笛に、ティファは一瞬、ビクっと身体を強ませた。
だが、それは彼女に対する警告ではなかったようだ。彼女の少し前に乗るはずだった乗客が、新顔の警備兵に取り押さえられている。
おそらくティファと同じように偽造ＩＤで魔洗列車に乗ろうとして見つかったのだろう。銃を突きつけられ、乱暴に押さえつけられると、そのまま詰め所の方に連行されていった。
（思った以上に監視が厳しいわね……）
ティファは努めて平静を装った。ここで不審な行動をとれば、警備兵に目をつけられることは必至だ。そうなれば、クラウドに会うどころでは無くなってしまう。せっかく手に入れた機会を、棒に振るわけにはいかなかった。
（本当に大丈夫かしら……この偽造ＩＤ）
手首に巻きつけたブレスレッドに偽造ＩＤは記憶されている。本物と遜色ない出来ではあったが、それでもティファは不安だった。
だが、それ以上に彼女はクラウドに会いたかった。会って、誤解を解いて、そしてまた一緒に暮らしたかった。そのためには、泥の船でも乗る覚悟を決めていた。
（大丈夫、きっと大丈夫！）
ティファは自分自身に強く言い聞かせ、列車の乗降口の前に立った。
列車に乗れば自動的にＩＤが検知されるシステムになっている。祈るような気持ちで、彼女は魔洗列車に乗り込んだ。
「……」
警笛は……鳴らなかった。ティファはホっと心の中で安堵のため息をついた。
しかし、まだ油断はできない。列車が発車して、３番街に到着し、クラウドに会うまでは気が抜けなかった。見つかれば、即アウト。
道筋が一発で断ち切られてしまう。ティファは混み合う列車の中で、目立たないように、目立たないように、注意深く他の客の中へと紛れていった。
「プルルルルルッ」
まもなく、先ほどの警笛とは違った甲高いベルが列車内に鳴り響いた。同時にアナウンスが流れ始める。
「この列車は、３番街への直通列車となっております。もうまもなく発車いたします。しばらくそのままでおまちください」

魔法列車は、煌々と照らすライトの光で夜の闇を切り裂くように走り抜けている。
車内はむせ返るような熱気と湿気が充満していた。
窓は締め切られ、カーテンも完全に外の景色を遮断している。
薄暗い電球がチカチカと明滅を繰り返し、車内の様子を断続的に照らし出していた。
ティファの他にも多くの乗客がこの車両に乗っているようで、
お互いがお互いをぎゅうぎゅうと押し合い窮屈な格好を余儀なくされる。
普通の乗客にとってはこれ以上ない劣悪な環境でも、この状況はティファにとってむしろ好都合であった。
乗客が多ければ多いほど、自分をその中に紛れ込ませることは容易になる。
とにかく彼女にとって一番大事なことは、このまま問題を起こさずに3番街に到着することなのだ。
（このまま何事もなくやりすごせればいいけど……）
そんなことを考えていた直後、不意に列車にブレーキがかかった。
慣性の法則にしたがい、乗客がティファにいやおうなく寄りかかってくる。
仕方なしに、彼女は車両の端の方に体を滑り込ませた。
ここならば壁を背にして楽にやり過ごすことができる。
同時に、監視カメラからも見えにくい位置に立つことができた。
（それにしても混んでるわね……）
ティファはその異様な混雑ぶりを不思議に思った。
そもそも区画を超えて運行する魔法列車を利用する者は一般にはそう多くはいないからだ。
（え……？　何……？）
その時、ティファの身体に奇妙な感覚が走り抜けた。
彼女の柔らかな尻にゴツゴツとした手の平があてがわれる感触だった。
混雑した車内において多少触れてしまうことはあるだろうが、この手は明らかにある目的を持ったものだとティファは気づいた。

（まさか……痴漢！？）
思わず出してしまいそうになった悲鳴を、ティファはかろうじて押し殺した。
（こいつ……）
拒絶の意思を、身体の動きで表そうと試みた。
しかし、痴漢は何を勘違いしたのか、いっそう大胆にティファの尻を触り始めた。
尻の上に置かれていただけの手の平が、撫で回すように動き始めたのだ。不快な感触が、彼女の背筋を通って脳に伝わってくる。
（調子に乗らないでっ）
大きく身体を動かして抗議をしようとしたそのとき、彼女の目に監視カメラが映った。
（……！）
ティファは、自分が置かれた状況がかなり不利であることをようやく理解した。
（ここで騒ぐわけにはいかない……）
ここで痴漢を撃退することはティファにとって容易ではあったが、その後取り調べを受けることになれば、間違いなく自分が偽造 ID で列車に乗り込んだことがバレてしまう。それだけは避けなければならない。
そして、一度意識をしてしまうと、もうそれ以上身動きをとることは出来なくなってしまった。
車内の人間がすべて自分に集中している……そんな錯覚さえ覚えてしまう。
痴漢は、ティファが抵抗をしないことをいいことにその行為をますますエスカレートさせていった。
手をミニスカートの中に滑り込ませ、太ももの内を触り始めようとする。
（ひっ……）
声にならない悲鳴。
周りに気づかれてはならないという緊張が彼女の身体を萎縮させ、男の手の侵入をあっさり許してしまう。
同時に、また別の男の手がその柔らかな尻をまさぐり始めた。
（……一人じゃない！？）

ティファは、思いがけない迫撃に戸惑いを隠せなかった。
さらに迫い討ちをかけるように、また別の手が、彼女のスカートに手をかける。
尻にぴったりとくっついたタイトスカートが捲りあげられ、白い下着が丸見えになってしまった。
（こ……こんなことって……）
戸惑いを隠せないティファを他所に、行為はますます過激になっていく。
下着を尻肉の間に挟みこむように持ち上げ、顕わになった柔肌を遠慮もなく揉みしだいた。
均整の取れた尻肉は手の動きに合わせてその形を変え、さまざまな表情を見せる。
（ん……だめ……！）
ティファの身体が、気持ちとは裏腹に反応を始めてしまった。
秘部に埋め込まれた快感のマテリアが、彼女の意思を無視して身体に快感を認識させようとしているのだろう。
彼女は必死にそれを抑えようとした。
目立って見つかってはならないのと同時に、この男たちを調子に乗せるわけにはいかなかったからだ。
そんな彼女の気持ちを知ってか知らずか、男たちはますます尻を強引に触り始める。
撫で回し、掴み、擦っては叩いて、あらゆる刺激を彼女の尻に与え続ける。
（ひぅっ……待って……）
身動きもとれず、声もあげることができない彼女は、ただ黙って行為を受け入れるしかなかった。
（だめ……このままじゃ……なんとかしないと……）
それでもティファはなんとかこの状況を抜け出す方法を考え始めた。
彼女とて反新羅組織のメンバーなのだ。なにか、手があるはず……。
だがその思考は、突如身体中を走り抜ける痺れるような感触に吹き飛ばされてしまった。
（ひやうっ！！）

両乳首を上着の上からおもいきり摘まれていた。
尻ばかりに神経を集中させられている間に、いつのまにか別の手が彼女の胸を攻撃し始めたのだ。
突然の刺激に、ティファの身体は思わず反応をしてしまう。
（しまった……！！）
これではまんまと痴漢たちを調子に乗せてしまいかねない。
同時に、異変を察知した監視カメラが反応をしてしまう可能性もある。
幸い、カメラは何事もなかったかのように動きはなかった。だが男たちの手は、ティファの反応を楽しむかのように、彼女の胸を侵し始めた。その豊満な胸は男の手の中に納まりきらず、指の間からこぼれる様に溢れている。
男は背中から抱きつくようにして体を密着させ、上着ごと乳房を持ち上げてきた。
柔らかで豊かな膨らみが両側からぎゅっと寄せられ、谷間をより一層形作る。そして次には開放され、重力に任せてぶるんと震えた。
男はその豊かな質感を楽しむように、何度もその行為を繰り返している。
ティファは、男たちの好きにさせまいと身をよじった。しかし、混雑した列車内であることと、ティファ自身の目立ってはいけないという緊張感がその動きをぎこちなくさせ、かえって上着が捲くれてしまう結果になってしまった。
（そんな……）
これでは彼女自身が痴漢を望んでいるように思われても仕方がない。
抵抗もせずに、連んで痴漢の喜ぶような反応をしてしまっているのだから。事実、男たちはそう思ったのだろう。
上着は完全に捲くられ、屹立した両乳首は完全に曝されてしまう。顕わになったティファの両胸を、男たちは直に楽しみ始めた。
手の平で包み込むように揉みしだき、形を変える乳房をもて遊ぶ。
力の入れ具合で弾むような感触が返ってくる胸は、しっとりした手触りと弾力、そして質量を加えてまさに絶品と言えた。
男は手の平でこねるように揉んでは撫で、その合間には指に挟んだ乳首をつまんだり引っ張ったりしてティファの反応を楽しんだ。
「ん……ふぁ……」
徐々にティファの口から吐息とともに声が漏れ始めてしまう。
快感のマテリアが彼女の身体を快楽の色へと染め始めたのだ。

（こんなの……くやしいよ……）
心では拒絶していても、身体がその快感を受け入れてしまう。
そして、ついには両腕をもちあげられつり革に固定された状態にさせられ、完全に抵抗できなくなってしまった。
（なんてこと……）
いつのまにかティファを弄んでいた男たちは彼女のそばから離れ、少し離れたところからニヤニヤと卑猥な笑みを彼女に向けていた。
ちょうど、彼女を見世物に仕立てたような様子になった。
（え……？　何……？　なんなの……？）
予想外の展開に、ティファの混乱は最高潮に達した。
こんな状況では、痴漢をされていたことが公になってしまう。なにより目立ちすぎだ。
「今日の客はまた上物だぜ……たまんねぇなぁ。早く食りつきたいぜ」
「へへへ……」
不自然な状況に困惑するティファを嘲るように、観客となった男たちから好色な声が漏れる。
（いったい……これは……）
そして男たちの間から、この状況を答える者が姿を現した。
それは――ティファに偽造Ⅲでの乗車を勧めた、あの男だった。
「やあ、ティファちゃん。気分はどうかね？　おっと、答えなくても結構だよ。
答えはわかっているさ。もちろん、我々には関係ないがね……」
「くくく……」
ティファに話を持ちかけたときとはうって変わって、男は完全にその本性を現していた。
周りの男たちもそれに同調するかのように、男の欲望をむき出しにしている。
「これは……いったいどういうこと！？」
ティファは精一杯の声で、男たちに抵抗の意思を示した。

だが、男たちは意にも介さず、完全に獲物を見る態度で彼女に言い放つ。
「なぁに、この車両は……まさにこういうことのために用意された物なのですよ」
「……！」
「あなたのようにワケありで偽造ID を欲しがっている女をこの車両に乗せて、皆さんで楽しんでもらう……そのために私が用意した特別車両なのです」
「なんですって……」
「つまり周りの方々はみなお客様なのです。必死に気づかれまいと我慢していた貴女はとても可愛かったですよ……それとも、本当に気付いちゃかったですかな？」
「ひひ……」
「さっきちょっと声が漏れてたぜ」
「おいおい、早くしてくれよぉ。待ちきれないぜ」
優位な状況に立つ男たちは、好色な視線でティファの身体を値定めしている。
「さぁ、これからが本番です。せいぜい楽しませてくださいよ。
もちろん激しく抵抗するようなら偽造ID 所持で通報します。
なぁに、大人しくしていれば約束通り3番街には連れて行ってあげますから……」
男はこれ以上ない悪魔的な笑みを浮かべて、男たちの中へと紛れた。あとに残されたのは、繋がれた子ウサギ一匹と、腹をすかせた大勢の狼だけだ。鎖を解かれた野獣たちは、いっせいにティファの身体めがけて飛びつき始めた。
3番街に到着するまで、まだまだ長い時間が残されている――

「たまんねぇなぁ……この胸……やわらけぇ……」
「肌もスベスベだぜ……やっぱり若い女に限るな……」
男たちの欲望は津波となってティファに襲い掛かり、あっというまに彼女を呑み込んでしまった。
「やだ……ふぅう……いやぁあ」

男たちの愛撫は果てを知らずに続いた。
汗が雫のように乳房の上から伝っては落ちる。
ティファの身体は熱を持って、脳を――思考を蒸気の中へと追いやってしまう。
「おい、そろそろ代われって。俺もそのおっぱいを苛め倒してやりたい」
「俺もだ！」
「へへ……こいつはたまらんぜ……」
津波は留まることを知らずに押し寄せる。ティファの身体は、ただ為すがままに身をゆだねることしか出来なかった。
「乳首もこんなに立ってる……相当感じてやがるな」
別の男がティファの背後に回り、乳首を弄り始めた。指先でコリコリと転がし、弾き。つまんでは引っ張る。
充血した乳首はピンッと上を向いて立ち、彼女の興奮が高まってきているのを示していた。
「んっ……んっ……あぁっ……」
男たちの指の動きに一喜一憂するように息が漏れる。
痛みとも痒みとも判断しかねるような甘くすぐったい感触がティファの身体を支配した。
身体をくねらせ、感覚を誤魔化し、その責めに負けまいと抵抗を続けるティファだったが、
徐々に快楽に理性が覆い隠されていくのを止めることができなかった。

数人の男たちの手がティファの白い肌の上を這い回る。
しっとりと吸い付く彼女の肌を味わいながら、それぞれの自由気ままにうごめき続ける。
「やめて……やめてっ！　はふう……」
無骨な指が柔らかく張りのある乳房を粘土細工を弄ぶようにこねくり回すと、
うつむいたティファの口から拒絶の叫びと熱っぽい吐息が漏れた。
「んんんっ……んっ！　くあぁ……」
別の男の手は、もう片方の乳房を下から入念にマッサージをし始める。
たぷっとした気持ちのいい重量感を感じるはじけるような大きさの乳房が、男の手の動きに合わせて万華鏡のように形を変えた。
ティファのうつむいて歯を食いしばる頬がどんどん赤くなっていく。
潤んだ目を伏せ、じっと男たちの悪戯に耐え忍んでいる様子がたまらなく男たちの加虐心を加速させる。
「あうっ……あうぅっ……」
男たちはわざと乳房に集中して攻撃を続けた。
はちきれるような大きな胸が、ティファにとって恥ずかしいコンプレックスであることを痴漢の本能が嗅ぎ付けていたのかもしれない。
「さすがにこれだけデカイと握り甲斐があるってもんだ……」
後ろに回った男が、わざとティファの耳元で囁くように呟いた。彼女の羞恥心が、その言葉でますます掻き立てられていく。
そして身体もまた、それに呼応するかのように彼女の心とは裏腹に燃え上がってしまう。
（こんなの……ぜったい……ダメぇ！）
行為を認めたくない心と、受け入れてしまいそうな心とがせめぎ合いを続ける。
「ふう……ふあっ！」
思い切りだしたはずの抗議の声もくぐもった吐息に変換されて、男たちの征服欲をますます増大させてしまう。
「こんな状況でも感じているんだな……淫乱な女だ」
悪魔の囁きが、耳を塞ぎたくても勝手に入ってくる。
それがティファを辱めるための言葉であるとわかっていても、彼女の心は屈辱で埋め尽くされてしまうのだ。

「次は俺だっ」
「いや……俺だ！」
「情わねぇ、やっちまおう」
ついに男たちの欲望のタガが外れ始めた。
それまで痴漢たちの間にあった暗黙のルールのようなものがなくなり、誰彼構わずティファの身体を蹂躙し始めた。
スカートは捲り上げられ純白の下着が見えたかと思うと、あっというまに男たちの手で見えなくなってしまう。
「へへ……もう濡れ濡れじゃないか……スキモノめ」
指がティファのもっとも敏感な部分に触れ、しっとりと湿っているのを確認すると、
男たちは嬉しそうに彼女に囁きかける。ひとつの指が一点を押さえ込んだ。
その突起はすでに充血してショーツの上からでもハッキリわかるほどに起立していた。
そこをゴシゴシと擦るよう責められるたびに、ティファの身体に耐え難い快感が押し寄せる。
「だめ……いやぁ……」
さらに男は、ティファの敏感な部分を守っている薄布を落としにかかった。
スカートをはかせたまま、下着をずりずりと下ろしてしまう。
そしてついに、さらに奥底にある深い溝に、その指を沈み込ませた。
くちゅ……
半透明な愛液が指に絡みつく。そのぬるぬるとした液体を指先で確かめると、
男は起用に溝を押し広げ、さらなる内部へと中指を沈み込ませた。
「あふんっ！」
その瞬間ティファの身体は大きく跳ねて、きゅっと男の指を締め付ける。
「いい締まりをしてる……まるで処女のような感じ方だな」
言葉をかけられながら、乳首をコリっとつねられた。
ティファの身体は壊れた玩具のように反応を繰り返し、その度に男の指を締め付ける。

「あっ……アッ……っ……」

中に入れられた指は出したり抜いたりとピストン運動に変わり、徐々にそのスピードを上げてゆく。
ぐちゅぐちゅといやらしい音が鳴るたびに、ティファの身体は大きく反り返る。
股間で蠢部をかき回し、狂ったようにめちゃめちゃに反復を繰り返す指先は
ティファの体内に収まりきらない快楽を与え続けた。
「よっと……これでもっと触りやすくなるぜ……」
男たちがティファの片足を大きく持ち上げ、よりはっきり局部が顕わになった。
より大きく開かれた下腹部に、男たちの手が群がってゆく。
「ここかな……」
「いや、こっちだろう……」
ある者は充血した肉芽を指の腹でこすり、ある者はティファのアナルに指を這わせる。
太ももの内側を触る者もいれば、手淫になった胸に改めて攻撃をしかける者もいた。
まるで、ティファが一番感じる場所を誰が一番最初に探すかを競争しているかのように、
次々に場所を変えては彼女の反応を見て楽しんだ。
「あ……あっ……そこは……ダメっ……そこも……っっ」
ティファの身体は、そのどの愛撫にも律儀に反応を示した。
まるで痙攣しているかのように、常に身体がビクッビクッと震え続けている。

「はは……感じまくってるな」
「めちゃくちゃ淫乱じゃねぇか、この女」
「ここまで淫乱なのは久しぶりだなぁ」
男たちに溺び せられる侮蔑の言葉が、より一層ティファの身体を熱くしていく。
さらに、かろうじて地についてティファの身体を支えていた足も、別の男に持ち上げられてしまった。
踏ん張ることが出来なくなった彼女は、力を十分に入れることができずによりストレートに快感を受け入れてしまう。
「あはは っ、これじゃまるで神輿だな」
「へへ……」
そうしている間も、男たちの愛撫は休むことなく続けられている。
苛められ続けている肉芽は、痛いくらいに充血していた。
ぱっくりと開いた洞窟からは、絶え間なく愛液が滴り落ちている。
刺激に素直で敏感すぎる自分の身体を呪いつつも、どうしようもなく加速していく肉体の火照り。
なんとかしなければという焦りだけが心に浮かび、どんどん混乱していく。
「ひぃ……ひあうっ……いやっ……」

ぎちゅっ　ぐちゅっ　つぷっ……
ティファの喘ぎと下半身から聞こえてくる音が呼応し、リズミカルに響いている。
「おもしれぇ……もう玩具か楽器だな、これは」
「違いねぇ」
男たちは、ティファを人形か何かのように弄び続けた。
「ひっ……ひやぁ……」
ティファの瞳はすでに焦点があっていない。
言葉にならないため息を漏らすのみとなり、すでに理性は残っていなかった。
「もう……駄目……ダメ……だめ……」
埋め込まれた快感のマテリアが凛々と彼女の身体に快楽の信号を送り続ける。
ティファは、すでにそれに抗うことができない。
頭の中が真っ白になり、なにも考えられなくなって、そして遂に境界を越えてしまった。

「んんッ……あああっっっ！！」

唇からためこんだ快楽を吐き出すように声が漏れる。
同時に、股間から透明な液体が勢いよく吹き出て、下着と男たちの手を濡らしていく。
「イッたな……」
「ビショビショじゃないか」
男たちの声も、もはやティファには届かなかった。
愛液は止め処もなく流れ落ち、床にボタボタとたれ落ちる。
（もう……この快感に……逆らうことが……できない……）
立ったままびくびくと身体を振るわせたティファは、そのまま気を失ってしまった。

時間にすれば数十秒ほどだろうか。気がつくと、ティファは後ろ手に縛られた状態で、列車の座席に寝かされていた。
頭は霧がかかったかのようにハッキリせず、ずっしりと鉛が埋め込まれたような気だるさが身体に取り付いている。
「やっとお目覚めかい？」
「まだまだ終わりじゃないよ、ティファちゃん」
「俺たちはまだぜんぜん気持ちよくなってないんだ」
薄ぼんやりとした脳内に男たちの声が聞こえてきたことで、ティファは先ほどの宴が夢ではないことを再認識させられた。
「さて……俺からいかせてもらうぜ」
大柄な男が寝ていたティファの腕を引っ張り強引に立たせると、後ろから手錠をとるように
腕を持って彼女を押さえつけた。
「あうっ」
ティファは痛みで顔をしかめるが、男たちはもちろんそんなことは気にしない。
めくれた裾から美味しそうな尻肉が突き出されると、男はショーツをどけて塗路を確保して、
ビクビクと脈動する自らの肉棒をティファの秘所にあてがった。
つぶぶっ……！
「ん……くうぅっ！！」
股間を内側に引っ張られるような感触に、ティファは呻き声をあげた。身をよじる彼女の背中を押さえつけ、男は構わず腰を進める。
侵入を続ける男根は、先ほどの愛撫で溢れるほどに濡れた膣道に迎えられ、ぐちょぐちょといやらしい音を立てながらピストン運動を
繰り返した。
「へへ……こいつはすげぇ！　かなりの名器だ。吸い付いてくる！」
身震いをしながら男が興奮した声をあげる。
（こんな……こんなことを言われて……）
恥辱にまみれた言葉以上に、ティファはその動きに反応してしまう自分の身体が許せなかった。

肉棒を突かれるごとに鼓動が高鳴り、息が荒くなっていく。
快感の信号がひっきりなしに脳内に突き刺さり、身体を震えさせてしまう。男はじっくり時間をかけて根元まで埋めると、
そこでさらに感触を味わうように腰を捻った。突き上げられたティファの尻が浮き、尻肉がぶるっと振動する。
さらには、そのまま腰を押さえ込んで固定し、膣の中をぐるぐると掻き回してきた。鈍痛に似た感覚が、ティファの身体を包んむ。
そして、奥で暴れていた亀頭が今度は後退を始めた。膣壁の襞がぞろぞろとカリを擦り、ティファと男の両方に耐え難い快感を与える。
「あああっ……はあん！」
「くううう……たまらん……もうイッちゃいそうだ！」
ギリギリまで引き出した男根を、もう一度快楽の穴へと突き刺していく。それを何度も壊れた機械のように繰り返しては、男は声をあげた。
だんだんと腰を打ち付けるような激しいピストン運動へ切り替わっていく。
「あっあっあぅ……あふ……ひぁっ！」
男との腰とティファの尻が激しい激突を繰り返し、彼女の口から短い声が途切れ途切れに流れ出す。
「うう……もうダメだ……イッちまう！」
男はぶるっとこれまでで一番の身震いをさせ、ティファの中にすべてを注ぎ込んだ。

「まだまだ後が控えてるんだ。お楽しみはこれからだよ」
次にティファにその触手を伸ばしたのは、スーツ姿のこざっぱりした男だった。
「こんなに立派な胸があるんだから、利用させてもらわないとね」
男はニヤリと笑うとティファをシートの上に寝かせ、自分はその上にまたがった。
「いやっ！何ッ！？」
ティファの豊満な胸を掴むとその谷間に自らの男根を置き、
そして両側から挟み込むように押し付けた。
嫌がるティファにかまわず、両方の乳房をマッサージするかのように強く揉みしだく。
丹念にそしてゆっくりと、柔らかい胸の感触を楽しみながら腰を激しく動かし始めた。
熱を帯びた陰茎の感触が乳房を通して伝わってくる。
身体の各所を責め立てる快楽の熱に、ティファ自身の身体もよりいっそう熱くなっていくのを感じていた。
男の方もまた、胸の愛撫と腰のグラインドをますます激しくしていく。
「くっ……最高の胸だな……形もいいし、柔らかさもちょうどいい……ぜっ」
男の声も、だんだん興奮に包まれていく。
そして、しばらく続けていた腰の動きを止めると、
「ん……そろそろ締めといくか」
そう言うと、男はティファのお腹の上から身体をどけ、
十分に濡れそぼり受け入れ態勢の整ったティファの股間に、今か今かと挿入を待ちわびていた男根が直撃させた。

「くぅ……う……あっ！」
股間へと送り込まれる鈍く強い刺激に、ティファははしたない声をあげてしまう。
そして、男の肉棒は、ティファの肉壺へ深く埋め込まれていく。
「や……やめてぇ……」
ティファはかろうじて抵抗の声をあげた。
しかし、男たちがその素晴らしい獲物を逃がすはずもない。
「へ……もうずっぷし入っちまってるぜ」
ティファの両足を高く持ち上げ、さらに深く根元まで挿入させニヤニヤといやらしい笑みを浮かべる。
「あ……あぁ……」
男の肉棒が、彼女の中で暴れ馬のように跳ね回ると、ティファは深いため息をついた。
彼女の子宮が本人の意思とは無関係に燃え上がる。
（くぅ……こんなの……こんなの絶対……いやぁっ）
快感と嫌悪感と。相反する二つの感触が、ダイレクトに彼女の脳を責め立てる。
「あ……あ……あぁ……だめ……だめぇ……」
荒く息をつく。男の腰使いは非常に巧みであった。
浅く、深く、大きく、小さく。
先ほどのパワフルな突き上げとはまた異なった、テクニカルな動きでティファの下半身を苛め続けた。
その間も、他の男たちは乳房を、首筋を、耳裏をと、彼女の全身を容赦なく愛撫し続ける。
（あ……あっあっあっ……くふぅ……ひぃ！）
押し寄せる快楽の波が、ティファの脳内を飲み込んでいく。
愛液は床に水溜りを作るほどに分泌され、乳首もクリトリスも赤く充血してピンと立ち上がっている。
全身は桜色に上気し、むせ返るような匂いが辺りに満ち始めた。
「そらっ、もう少しだ！」

男の絶頂が近づいてきたようだ。
それはティファの身体も同じだ。
彼女の下腹部に電気信号が走り、再び彼女の意識が真っ白に塗りつくされていく。
「だめぇぇぇぇ……あああっ！」
「くっ！」
ティファは甘い声で鳴き、男もまた喉の奥から声を絞り出す。
女の膣が激しく痙攣し、そして男の肉棒の先端から白く濁った欲望が勢いよく解き放たれた。

ティファは次から次へと犯され続けた。
獣が餌を食い散らかすように、彼女の身体は蹂躙し続けられた。
何度も何度も何度も何度も犯され続ける間に、ティファの脳は徐々に思考することをやめていった。
それでも男たちは止まらない。
糸の切れた操り人形のようになった後も、ますます激しく彼女をいたぶり続けた。
口内に、膣内に、お腹の上に、顔の上に。
男たちの欲望が次々解き放たれていく。
すでに欲望を射出した者も、再度充電をしてはまた彼女を汚した。
欲望の列車は止まることなく走り続ける。
目的地へはまだまだ遠い。
列車が3番街に着くのが先か、
男たちの欲望が尽きるのが先か――

ティファ　最大の快感　最大の屈辱

ホテルの一室で、快感のマテリアを体に入れられ、
敏感になった体中を舐められ触られ快感に悶えるティファ。

快感のマテリアの効果で　絶頂をむかえるごとに敏感になる体…。
エアリスの手によって休むことなくイカされ続け、
ベッドで風呂場で所構わず犯われる…。

そして快感のマテリアは完全に成長し、
どんな状況であろうと　自分の意思とは関係なくイカされてしまう。

卑猥な道具、拘束具などが完備された部屋に監禁されたティファ。
敵よこのマテリアの効果で群がってくる男たちの手によって、
全身性感帯となったティファの体は悲鳴を上げ…。

触れればのけぞり、性器を弄ればすぐにイクようなティファに対して
絶対にイカせない寸止め地獄を強いる男たち。
無理矢理イカされる屈辱をも上回るイカせてもらえない苦痛にティファは…。

完全攻略ティファロックハートも収録　　18歳未満の方は購入できません。